

国際フランコフォニー学会 第 28 回世界大会
参加報告

Conseil International d'Études Francophones (CIÉF)
28^e congrès mondial, 29 juin -6 juillet 2014, San Francisco

国際フランコフォニー学会 (CIÉF) の第 28 回世界大会が 2014 年 6 月 29 日から 7 月 6 日までアメリカ合衆国サンフランシスコで開催された。AJEQ からは、鳥羽美鈴、長谷川秀樹、立花英裕が参加。全体では 250 名程度の規模となり、70 近いセッションが組まれた。

会場はチャンナタウンに接したヒルトン・ホテル。筆者は空港からタクシーで向かったが、丁度有名な同性愛者パレードの日にあたり渋滞に巻きこまれ、動かなくなったタクシーの窓からいつまでも港の風景を眺める次第となった。ホテルに到着後、外に出てサンフランシスコ名物の坂道を散策すると、アジア的な町並みに胡琴の響きが流れ、そぞろに歩く人々が穏やかな表情をしていて、こちらの心が和んだ。ホテル内の食事は安くなかったが、チャイナタウンで比較的安価に、気軽に、かつ待たされずに食事できるのがよかった。

第 28 回のテーマは « *Quêtes et conquêtes de nouveaux mondes* » だが、これが実質的な中心テーマになっている印象は薄く、地域的にはアフリカ、カリブ海域、ケベック州を軸として多彩なセッションが編成されていた。筆者はエクサンプロヴァンスでの大会 (2011 年) 以来の参加だが、あの時はダニエル・マクシマンのような著名詩人の講演があり、歌やダンスもあって、祭典のような盛り上がりがあったが、今回は、楽しいパーティーで羽目はずす機会もなく、地味で実質的な大会だった。いわば学術一本槍という雰囲気だったが、各研究発表が充実していたし、質疑応答も活発で、得るところ大であった。ホテル 2 階の狭い空間に会場が限定され、休憩時間にはみな一カ所に集まるしかないのが、初対面の人と交流を深める機会が生まれやすかった。これは個人的に有益だった。

AJEQ のメンバーの発表だが、まず立花が、大会 4 日目の 7 月 2 日のセッション « *Aimé Césaire et ses intertextes* » で、« *Ombres maldororiennes dans la poésie d'Aimé Césaire* » というタイトルで発表を行った。エメ・セゼールに

おける、『マルドロールの歌』著者ロートレアモン伯爵の重要性はよく知られているが、たいいていはシュルレアリスムとの関連で論じられ、両詩人をじっくり突き合わせた研究は意外に少ない。発表では、ロートレアモン伯爵ことイジドール・デュカスは南米から来た人間であり、カリブ海からパリに來たセゼールと同じようにフランス本国文化に違和感を覚えていたのであり、そうした視点から詩的言語を比較検討すると、どちらにもフランス詩の伝統には納まらない詩的・文化的格闘が見られることを指摘した。会場には LEE Jisoon さん、SHIN Ok-keun さん、Gilles Dupuis さんなどが来てくださり、Gilles Dupuis さんからは内容の濃い質問があった。

7月4日午前のセッション « Enseigner la Francophonie – I : approches, stratégies, technologies » では、鳥羽が « L’enseignement de la Francophonie au Japon » と題して、長谷川が « Étude comparative des îles francophones : le cas de la Corse et des communautés acadiennes de l’Ile-du-Prince-Edouard » と題して、それぞれ発表を行った。鳥羽の発表は、日本の大学教育の現状と、報告者によるフランコフォニー教育の実践例を紹介するものだった。フランコフォニーの講義は、国際組織 OIF、あるいはフランス語圏諸国の言語文化など、幅広い領域をカバーしなくてはならないので、学生の興味を惹きつけるのが難しいが、アフリカ諸国など学生の関心度が概して低いテーマでも正面から積極的に取り上げ、それを身近な問題と関連付けて映像なども交えて説明すると効果があるという内容だった。

長谷川は、コルシカ島とプリンスエドワード島の言語状況を比較論的に紹介した。この2つの島はどちらも2言語社会であるが、フランス語がマジョリティかマイノリティであるかで異なっている。コルシカ島では事実上のコルシカ語をフランス語に優先させる政策が進んでいること、プリンスエドワード島ではアカディア人たちが訴訟を通して、幾つかのコミュニティでフランス語学校新設が実現したことが示された後で、それぞれの現状における課題や困難が論じられた。

質疑応答では、日本のフランス語教育について質問が出て、フランス語選択の学生が減少していると鳥羽が回答したが、会場の出席者は、大学の第2外国語教育に通じておらず日本のフランス語学習者はごく限られていると思い込んでいたようで、むしろ、フランコフォニーの講義に300人も学生が出席していることに驚いていた。そうした日本の文化・教育状況をめぐる基本的な認識の相違が質疑応答を通して現れていた。

先に述べたように、今大会は目玉になる大きな企画がなかったが、アメリカ合衆国のフランス語話者についてのドキュメンタリー映画 *Un rêve américain* (Claude Godbout et Bruno Bouliane) が上映され、また、3人の詩人による朗読会が催された。特に詩の朗読はなかなか聴ける機会のないもので、笑い拍手の渦が湧き上がっていた。ルイジアナ出身の詩人 Kirby Jambon によるフランス語と英語の混じった朗々と響く、でもコミックで、どこか哀愁の漂う詩的世界、来日もして、私たちに馴染みのケベックの詩人 François Hébert による、日常的な細部をテーマにしながら、詩的技巧が冴えるユーモラスな言葉遊び、アルジェリア出身の Hafid Gafaïti による、アルジェリアの人々の苦悩をくつきりと浮かび上がらせる緊張度の高い透明な詩が、各詩人の個性的な声で朗読された。詩人たちの競演のような緊張感もあって、会場の人々を楽しませていた。

総会では、2015年の開催地がセネガル・ダカールであることが紹介された後、会期短縮が提案され承認された。それを受けてダカール大会の会期は6月8日より12日となった。また、2016年の開催地が提案され、マルティニックと決定した。

(立花英裕)